

林 真

一九七二年岐阜県土岐市生まれ。一九九九年、名古屋芸術大学大学院修了。日展や個展グループ展を中心に発表する。会場では、生命をテーマに、風景や生物を精緻な描写でとらえた近年の日展出品品に加え、蛍光色など人造絵具を用いた作品も出品した。二〇一九年の日展名古屋会場では、水面に顔をのぞかせる鰐を描き、別世界へと誘う不穏な存在を表現した作品を出品。

青山 一九七二年生まれで、四十五歳。ご出身が岐阜県の土岐市で、今は岐阜市にお住まいですね？

林 八年ぐらい前に引越してきました。

青山 幼いころから絵を描きたいと思っていましたか？いつ頃から絵を好きになりましたか？

林 うちのはたまたま父も母もデザイナーの方ですが芸術大学出身なものですから、元々絵が好きで、広告の裏に描いた絵を父や母に見てもらうのが習慣としてありました。身近に絵を描くということが小さいころからあったので、絵でごはんを食べたいと思ったのは小学生くらいですね。

青山 早いですね。やはりご家庭の環境が美術に向かわせたと感じますか？

林 そうですね。今振り返るとやはりものすごく大きな原点です。

青山 今もご両親はデザイナーの仕事を？

林 父はもう引退して兄がやっていますが、陶器のデザインをしていて、絵を描く仕事をしているのを見るのが子どものころから好きでした。仕事のために父が色々なものを見に行く際に一人だけついていたり。

青山 小学生のころから将来絵の道にと思っていたのですが、中学、高校も意識したことはありませんか？

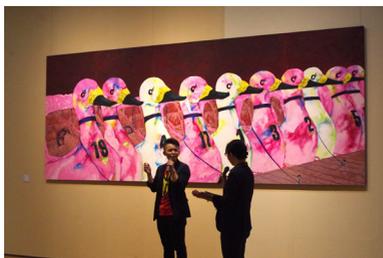
林 そうですね。中学、高校は普通のところに行っていました。高校は名古屋の高校に行っていて、河合塾の予備校のチラシをたまたま目にして、高校一年生から行ってみたいと思ったのが始まりですね。

青山 大学は名古屋芸術大学に進学しました。地元に近いところを選ばれた理由は？

林 今はあるかわかりませんが、河合塾で近くの大学へ見学に行くことがありました。今思い出すと名古屋芸大（名古屋芸術大学）の先生が一番、その時自分がどうしたらいいか、絵を描くにあたっての姿勢とか、そうしたものが一番響いてきたので、名古屋芸大一つだけ受けました。結構怖いことをしたなと思います。

青山 日本画への関心はいつから？

林 恥ずかしい話ですが、河合塾に通っているときの高三のころ、どこの科を受験するか選択するんですが、日本画という言葉を知らなくて、絵画だったら洋画でしょというそれだけの理由で洋画受験のコースにいました。でも、父が日本画を好きで、お前の筆は日本画の方があるとと言われて、変われと言われ、変わって、高三の夏から日本画を受験することにしたんです。なにもわからないまま、というのが最初です。



青山 意外と真っ白な出会いですね。

林 でもその時洋画でずっと描いてはいたんですが、どうも洋画の絵具が自分に合わなくて。塾に行っても描けなくてすごく悩んでいた時期でした。そこを父が見ていたというのもあると思うんですけど。日本画の受験は水彩画なのですが、水彩絵具で描いたときに油絵具で嫌だったこと、自分の肌になじまなかったことが、一番自分の肌にすーっとなじんできた、それは今でも思い出せるぐらいとっても心地よい瞬間でした。そこから一生懸命、短い期間ですが、日本画を目指しました。

青山 一般でも、日本画の描き方を知るとか、画材そのものに出会うことってあまりないような気がしますね。地元の絵画教室も油の先生の方が多いように思いますし、たまたま日本画をやっている方と知り合わなければ、中々身近ではないようです。素材としての日本画にシンパシーというか、共感する部分があったということでしょうか？

林 今思うと本当にそれが大きかったと思っています。

青山 大学院に進学した理由は？

林 当時学部のところは大学院がなく、新設されたばかりだったんですね。なので、大きな作品を描くので場所も必要でしたし、日本画のことをもう少し先生方のいらっしゃるところで学びたいというのが一番の理由です。

青山 大学、大学院の学びの中で、重要な出会い、良い出会いだったと思える先生や先輩はいましたか？

林 研究課程の時に、岐阜在住の長谷川喜久先生が講師で入られました。やはり長

谷川先生に出会ったことが今ここに立っている理由でもある気がします。

青山 公募展の日展を出品先に選んでいるのは何か影響がありますか？

林 私が土岐市出身なので、ご近所に日展に出品されている方が沢山いらっしゃって、子どものころから知った方の作品を見て家族で日展に行くというのが恒例行事でした。ものすごく自分の中で小さいときから身近にあった公募展で、たまたま名古屋芸大に日展の先生方が沢山いらっしゃるといふこともあって、ずっと出品をつづけています。

青山 初出品の時に入選して、中日賞を受賞しています。今は生き物をテーマにしていますが、そのころの作品のテーマはどんなものでしたか？

林 初入選の作品は偶然見つけた廃車になった車が二台寄り添っている絵です。その時代は割とそういう人工的で朽ちたものを好んで描いていた時期です。

青山 ということは風景ですよ。人物や動物ではなく。当初風景をテーマにされていたところから、今回出品の《業》では、蛸がカニを捕まえている、捕食者と被捕食者の生き物の絵へ。動物を描くように転換したきっかけはありますか？

林 その少し前、三十代前半から後半にかけて、樹や岩など自然のものを自分がこういう風に見ましたというものを描いていたのですが、それ以上のものを出せなくて煮詰まっている状況でした。絵の中に自分が感動して、何を伝えたいのかということへの答えをより明確に探していたときにやはり生き物が助けてくれたというか、その姿を借りて表現するというのを追求しました最初ぐらいの作品です。

青山 岐阜県との関わりでいうと「臥龍桜日本画大賞展」に出品して、二〇〇四年に

優秀賞、二〇〇五年に大賞を受賞しています。そのころはまだ風景でしょうか？

林 優秀賞のころは大学院を出て、アトリエでたった一人で描くことに慣れていなくて、すごく模索をずっと続けている状態のときでした。「臥龍桜」に出たいけれど、何を描いたらいいかわからない、じゃあ自分自身を描けばいいんじゃないかと、鏡の前に自分を描き、《明日》というタイトルで描いた作品です。それで優秀賞をいただき、次の年にそれぐらいのころから、自分はこの風に描きました、自分はこう言いたいというのが少しだけ上手に表現できるようになったかなというぐらいのときに、ありがたいことに一つ上の賞をいただけ嬉しかったです。

青山 二〇〇五年に岐阜市の芸術奨励賞も受賞していますが、このあたりから二〇一三年の《業》に至るまでも悩んでいましたか？

林 日々悩んでいる感じですが・・・(笑)

青山 すみません。質問がうまくなくて。《業》について、見て欲しいところは？

林 モデルになったのは京都水族館にいるミズダコです。気持ち悪いぐらい大きい蛸で、戦車のように動いている、それだけで圧倒されて感動して。どういう風に描こうというより、これ描きたいと思ったぐらい感動しました。そのときまたまた蛸が沢蟹を全部食べてしまうという衝撃的な映像を見まして、自分が蛸やこういう生き物を描きたかった理由がぼつと頭の中で整理できて、こうした絵になりました。私たち人間もそうですけど、生き物って他の生き物の命をもらってここにいるということがあって、そういった祈りにも近い気持ちで描いた作品です。

青山 今回、出品作の中で非常に大きい四メートル五十センチ幅の《スワン》。今年

一月の名古屋での個展(註一)に出品されました。その前に日展でスワンボートに鴨が群がった《飛べない王様》という作品が出て、あの作品がこの《スワン》につながっていると思いますが、個展で意図したことはありませんか？

林 おっしゃるとおりで、日展で《飛べない王様》というタイトルで、そこに沢山の鴨が浮かんでいるという絵を描いたんですが、やはり人工のもので、命はないけれど、顔があるからか、命はないのになぜこんなにはかなくて悲しいんだろうと思って、こうして並んだ絵を描きたいと思って制作しました。

青山 銀泥や銀箔を用いた渋い色調の作品が多いように、日展等で見て感じていたのですが、この作品はむしろピンクや明るいグリーンが主です。色使いでは日展の作品の中でも、明るい色がふつと差し込まれることが多くなってきたと思います。このあたりの色彩の選択は意図的なものがありますか？

林 この作品は描き方も悩みましたが、本当はより現場に近い。東山動植物園に並んでいるスワンボートは、順番を変えたぐらいで本当にあったものを描いています。やはり淡々と並んでいる感じが一番伝えたいことであって、現場そのものを描いた方が伝わると思って描きました。合成樹脂のようなテカテカの色のピンクとかツヤのよくなるものは日本画の画材では出しにくく苦労したのですが、これだけ大きいのでやるしかないと思って描きました。

青山 今回、日本画という言葉から連想する穏やかな花鳥風月のような先入観を覆す作品を、《スワン》をぜひとお願いしました。展覧会にお誘いした時はどうでしたか？

林 テーマについてはさほどでしたが、岐阜県に生まれ育って、若い時から来てい

註一 「林真日本画展―いとしまのたちへ―」2017年1月25日(会場：ジェイアール名古屋タカシマヤ)

るのでそんな場所に自分の絵が飾られることが自分にとってありがたいことだと思
ました。

青山 今回ここに三点、サテライト会場に《冬の蝶》が一点、四点出ています。こ
を見てほしいということがあればもう一言お願いします。

林 一作一作、しんどい時もあるんですが、一生懸命制作したもので、
見ていただければうれしいです。

青山 今ちょうど高島屋で名古屋芸大の仲間と展示されていますね？

林 名古屋芸大の教員の方、卒業生と熊本の崇城大学そうじょうの方とコラボでグループ展
をやっています。

青山 今後描きたいテーマがあれば教えてください。

林 今後、こうというのははっきりないのですが、さっきも言ったように、日々の
生活でひっかかることとか、みなさんに伝えたいこととかに真摯まじしんに向き合っ
て描いていきたいと思っています。

